

ENCYCLOPEDIA
NIPPONICA
2001

日本大百科全書

ENCYCLOPEDIA
NIPPONICA
2001

16
てとく

小学館



日本大百科全書 16

©SHOGAKUKAN 1987
昭和62年7月1日 初版第一刷発行
定価 7,800円

編集著作
出版者 相賀 徹夫

発行所 小学館

郵便番号 101
東京都千代田区一ツ橋2-3-1
振替 東京8-200番
電話 編集・東京03-230-5620
業務・東京03-230-5333
販売・東京03-230-5739

印刷所 凸版印刷株式会社

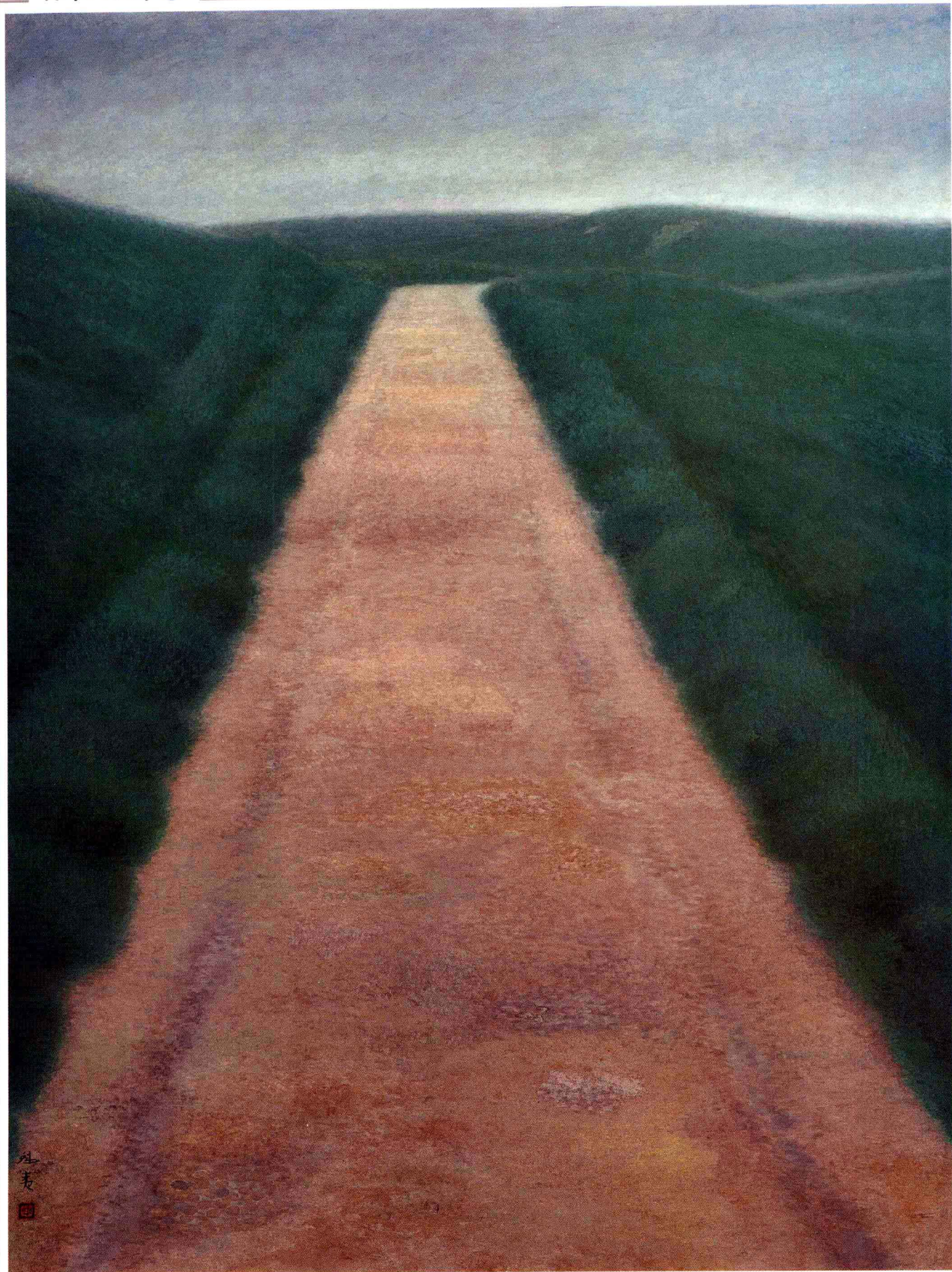
本文 (特抄百科用紙) 王子製紙株式会社
口絵 (特抄アート紙) 三菱製紙株式会社
表紙 (特製クロス) ダイニック株式会社

製本 凸版印刷株式会社
若林製本株式会社

- *本書に掲載した日本関係地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図、5万分の1地形図、20万分の1地勢図、2万5千分の1土地利用図および『日本国勢地図張』を使用したものです。別刷「東京」地図の作成にあたっては、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図を使用しました（測量法第30条に基づく成果使用承認 昭62関使、第7号）
- *造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。
- *本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

ISBN4-09-526016-5





東山魁夷画『道』
1950年（昭和25）134.0×102.0cm
（東京国立近代美術館）

初夏の朝の草原。
一筋の道がゆるやかに登ってゆき、
その頂点で視界から消えている。
遠くの丘にその続きと思われる一線が、
ほのかに見える。
私にとって、

この道は切実な祈りの表れである。

（東山魁夷・文）

情報社会への対処

文明はひとつのシステムである。システムを安定的に維持するためには、状況の変化に応じて、つねに不都合な部分を手なおしする用意がなければならない。わが国の交通システムの展開は、そのひとつの好例であろう。今日では、わが国の交通秩序は、たえず細部が手なおされることによって、先進国のなかでも、随一の安定をたもっているといえよう。

情報システムについても同様なことがいえる。部分的な欠陥に対するたえざる修正は不可欠である。もともとわが国には、パッチワーク（つくろい）の伝統がある。つくろいをかきねることによって、柔軟性に欠けるところをおぎない、国家なり、社会なりを維持してきた。理想という名のイデオロギーの支配はほとんどなく、きわめて現実的なつくろいで対処するのである。安定といえば静的にきこえるが、動的平衡をたちつつ、ゆるやかに価値体系を変革し、人間が社会に適応する。

現代では、情報機械の発達やニューメディアの出現は、あらたなる状況をつくりだしつつある。それは人間の精神をふかく、ひろくたがやす。ラジオで音楽をきけば、なま演奏をききたくなる。テレビドラマを見ると、原作の小説などがよみたくなる。また、登場する人物を百科事典でしらべたくなる。テレビ、ラジオあるいはニューメディアは、いわば情報開発機械であり、印刷媒体の前衛として社会開発をしている。それゆえに文字情報への欲求は、あたらしい情報機器類の開発によって増大こそすれ、へることはない。

人間の心をたがやして、肥沃な土壌をつくるというのは、そもそもは教育がなうべき分野であった。そこから文化的欲求がうまれるのである。機会をのがさずにそこに種をまけば、当然すくすくとそだつ。今日のわが国の大衆の文化的欲求のたかさは、世界の最高水準にあるとおもわれるが、日本の社会は、階級差がなく、文化的欲求自体が全市民に均質的に分有されている。このような高度に知的な国民大衆が形成されたということは、世界の歴史のなかでもめずらしい。

サルが二本足で立ったとたんに、視野がひらけ、手を自由につかいこなし、あたらしい行為や思索をうみだした。端的にいえば、高度情報化社会の出現はこれに似ている。人間はいままでもちえなかった能力をそなえるにいたった。それは、これまで不可能であったことが、可能になるということである。単にものごとの処理が、便利になったということではない。高度情報化社会の到来は、人間にあたらしい地平がひらけはじめたことを意味し、社会生活や家庭生活に本質的变化を生じせしめる。それがよいことなのか、わるいことなのか、便利なのか、不便なのか、それはわからない。既成の基準をこえたものが発生しているのである。ともあれ、あたらしい状況に対して、われわれは機敏なる「つくろい行動」で対処するほかはない。二一世紀まで一三年あまり、あたらしい能力を、人間はどうつかいこなしていくのであろうか。

梅棹忠夫

(梅棹忠夫)

装 丁

亀倉雄策

本扉／書

青山杉雨（連作書体のうち、宋時代、蘇東坡・米元章書法による行書）

巻頭口絵

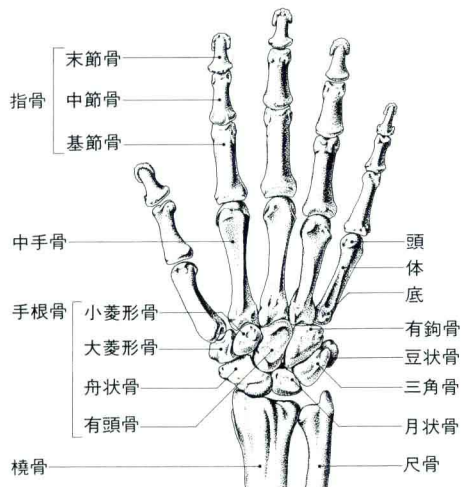
東山魁夷

本文五十音題字

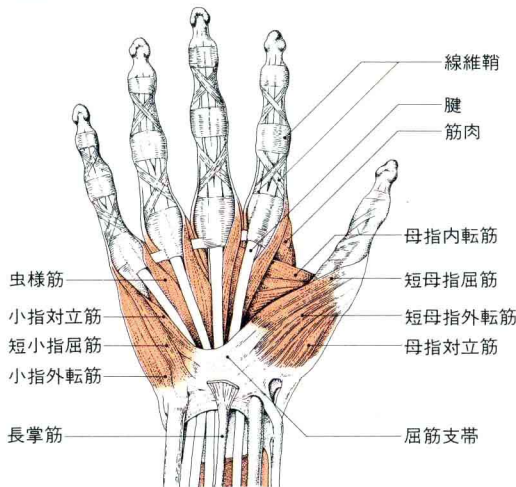
木元壽美江

手／各部名称

背面から見た右手の骨



掌面から見た右手の筋肉(手側の長掌筋は切除してある)



平仮名〔天〕ちててて
片仮名〔天〕てててて

て 五十音図第四行第四段の仮名。平仮名の「て」は「天」の草体から、片仮名の「テ」は「天」の初めの三画からできたものである。万葉仮名では「弓、氏、底、天、提、帝（以上音仮名）、手、而、價、直（以上訓仮名）」などが清音に使われ、「代、田、但、泥、漉、庭（以上音仮名）、而（訓仮名）」などが濁音に使われた（「而」は清濁両用）。ほかに草仮名としては「ぢ（帝）」「ぢ（亭）」「め（轉）」「ゆ（傳）」「る（豆）」などがある。

音韻的には「te」（濁音「de」）で、上歯茎と舌との間で調音する無声破裂音「t」（有声破裂音「d」）を子音にもつ。〈上野和昭〉**手**で解剖学では上肢を腕（上腕と前腕）と手とに区分し、手は手首から先をいう。俗に、手足などといって、大まかに下肢に対して上肢を「手」と表現することもある。手は、ほぼ四角形の扁平な部分として手首の先に広がるが、屈曲させて凹面をつくる部分を手の掌面（手掌、たなこ）とよび、凸面側を手の背面（手背、手の甲）とよぶ。手の扁平部分の遠位縁からは、五本の指が出る。五指のうち、母指（第一指、親指）がもっとも太く、かつ短い。中指（第三指）がもっとも長い。

く、以下環指（第四指、薬指）、示指（第二指、人差し指）、小指（第五指）の順に短くなる。各指の末端の背側部には、皮膚の表皮が角化してできる爪が付着し、指の先端を保護している。手掌面の皮膚には、多数のしわや溝が縦横に走っている。このうち、横に走る太いしわは手掌や指を屈曲したときに生じ、運動皺襞（慣用では「うんどうすうへき」と読む）とよぶ。これらのしわは、手相学ではいろいろの意味をもつものとして取り扱われているが、科学的な根拠はない。手掌面には細い溝（皮膚小溝）と各小溝の間の高まり（皮膚小稜）とが平行して走っている。その方向は、各個人に特有な紋様（掌紋）をつくっている。また、指の先端の紋様は指紋（触紋）とよばれる。これも各個人に特有な走行を示す。掌紋、指紋とともに個人識別に利用されている。指紋は胎生三か月から四か月に出現する。皮膚小稜の高いところには、汗腺の導管の開口部、すなわち汗口が配列している。↓指紋 ↓掌紋

手掌面を見ると、母指と小指の長軸に沿った部分、第二〜第四指の基部、各指の末節中央部のそれぞれに、円形あるいは楕円形をした広い皮膚隆起が認められる。これを、それぞれ手根小球（橈側は母指球、尺側は小指球という）、指間小球、指小球とよんでいる。また、これらを総称して触球とよぶが、この部分には神経終末が豊富に分布し、触覚が鋭敏である。手掌面には毛、脂腺がない。また、手掌面の皮膚にはメラニン色素がないため、他の皮膚部分よりも白くなる。手掌面の汗腺の数は一立方センチメートルあたり二個であるが、手背では約一・五個、示指先端では三個ほどとされる。

〔手の骨格と筋〕手の構造の基礎となり、手の運動の支えとなる骨格（手骨）は、約三〇個の骨からできている。手首（手根）の部分には八個の手根骨が配列する。手根骨は、前腕の長軸方向と直角に位置し、四個ずつがほぼ平行に並んで配列している。手根骨の遠位列と連結する骨が中手骨で、細長い五個の骨から構成される。中手骨は手掌の骨格となっている。各指の骨格となるのが指骨である。指骨は、母指が二個、他の指はそれぞれ三個からなっている。中手骨と直接連結する指骨を基節骨といい、順次先端に向かって中節骨、末節骨とよぶ。母指は基節骨と末節骨だけで、中節骨が欠ける。遠位列の手根骨と中手骨との関節（手根中手関節）や中手骨と基節骨との関節（中手指節関節）は、多軸的に動いて、手首や指の複雑な運動を可能としている。↓手骨 ↓触る ↓つかむ

手の骨格を動かす筋肉は、ヒトではとくに発達しており、精緻巧妙な手の運動の原動力となっている。このことは、霊長類、とりわけヒトにおいて、その進化に大きな役割を果たしてきた。手の運動をつかさどる筋肉（骨格筋）は、前腕と手掌とにあり、ともに横紋筋である。そして、手の筋肉はすべて手掌側にある。母指を思いきり反らして、母指を外転し、伸展させると、手背の母指側で手首から母指方向に向かって三角状のくぼみができる。これを「解剖学的嗅ぎたばこ壺」とか「嗅ぎたばこ入れ」（タバチュール）という。これは、長母指伸筋と短母指伸筋の両筋に挟まれてできるくぼみである。このくぼみの底で、橈骨動脈の拍動を触れることができる。

〔動物の手〕脊椎動物の前肢末端部分をいう。

物をつかむ機能をもっている霊長類について用いられる語であるが、他の動物に用いられる場合は、やや擬人化した意味でこの部分をよぶ。上腕・下腕部を除いた手首・手のひら・指からなり、それぞれ腕骨・掌骨・指骨を含み、複雑な筋肉が発達している。動物の種類によって手の解剖学的構造に多くの変化がみられる。たとえば、樹上生活を営むものでは手が発達し、指が長く、先端部を保護するつめが伸びている。コウモリでは第一指（親指）に鉤つめがあり、他の指は長く伸び、それらの間に飛膜が発達している。ウマでは第三指骨だけが非常に発達している。クジラやオットセイの手は、水中生活に適応して退化し、魚類のひれに似た形になっている。魚類のひれと哺乳類の手は相同器官である。

〔川島誠一郎〕

〔手の象徴的意味〕手が宗教的観念と関連して象徴的意味をもつ現象は広くみられる。霊的存在への訴えとして手を伸ばす、打つ、指を特定の型に組む（密教の印相など）などの動作をとることが多い。妖術師が手で触れ、指示し、凝視することにより生じる危害や凶眼から身を守るために指を組んで対抗する、などの慣行も広くみられる。何かを手に握って生まれた子供が特別な能力をもつとする文化も多い。日本各地に、岩の形状のくぼみをくぼみをくぼみ、弘法大師、諏訪信仰、雷神、弁慶などと関係づける説話があり、手無し娘型の昔話が各地で報告されている。

人体の他の部分から切り離れた手だけを描写して、特定の宗教的意味をもたせた旧大陸最古の例は、エジプト新王国イクナトンの改革宗教アトンを象徴する、太陽光線先端の手であろう。ユダヤ・キリスト教では、紀元前二世紀の成立とされる『旧約聖書』「ダニエル書」五章の「運命を予告する手」をはじめとして、偶像的表現を避けるために手だけで最高神を表現するのが文化的伝統になった。ユダヤ・キリスト教美術史上の「神を表す手」は、アルサケス朝パルティアの宗教美術の影響を受けた三世紀のメソポタミア（ドゥラ・エウロポス遺跡）に初めて出現し、中世キリスト教絵画に繰り返し用いられた。四・五世紀以降には按手札がキリスト教の秘蹟となり、この文化的伝統で手の特別な意味が確立した。聖書の上に手を置いて誓約するキリスト教の慣行、指を伸ばした手形を建物、とくに戸口の上部につけて妖術的危害の

侵入を防ぐアジア・環地中海地域の風習は、この伝統と関連する。

右手を神聖かつ有力で幸運な手とみなし、左手を劣等、不浄視する「右手の優越」現象は、手の象徴主義の重要テーマである。アジアの多くの地域では、排泄物処理に左手を用いる習慣とも結び付き、とくにこの原則を重視する。台湾の高砂族の右手（右肩）の優越はよく知られている。中世南インド（タミル地方）では、王国内の職業集団を都市手工業者を中心とする左手群と、農業経営者を中心とする右手群と二分する制度が発達し、祭礼時の二群の衝突事件と王権による事件調停の記録が古くからある。ただし、右手の武装を暗示する左手での握手の敵対性は、右手の優越以外からも説明でき、右手の優越の強い中国から導入した日本の律令制度下で左大臣の地位が右大臣の地位より高いなどの問題もある。↓印相

〔R・エルツ著、吉田禎吾他訳『右手の優越』（一九〇・垣内出版）

テア Albrecht Daniel Thaer (一七五二—

一八二〇) ドイツの農学者、財政学者。宮廷医師の子としてニダーザクセンのツェレに生まれる。ゲッティンゲンで医学を学び、故郷に帰り父を助け、父の死後その地位を継いだ。医業に満足できなくなったテアは、農場経営の実務と農業生産を高めるための科学的研究に没頭した。一八〇二年、農業者のための講義を始め、〇四年プロシア宮廷の秘書官、ベルリン科学アカデミーの会員となった。同年オーデル川沿いのメグリンへ移住。一〇年ベルリン大学の財政学教授。テアの活動範囲は広く、農業立法からヒツジのメリノー種の改良にまで及んだ。彼は、土中の腐植質の増加が農作物の収量を高める基本的条件と考え、腐植説の主唱者となった。主著に『イギリス農業経済序説』*Einführung zur Kenntnis der englischen Landwirtschaft* (一八〇六—一〇七)、『合理的農業の基礎』*Gründzüge der rationalen Landwirtschaft* (一八〇二—二)がある。

《渋谷寿夫》

出合茶屋 てあいぢや 男女が密会に利用した貸席の江戸用語。京坂では盆屋といい、料金は江戸より安いかわりに、酒肴を出さないなどの差があった。現代の待合やラブホテルに相当する。江戸では上野の不忍池畔や八丁堀地地にあつたものが有名だが、陰間茶屋や船宿なども利用された。取締りなどに備えて、客席を二階

に設け、出入口を二か所以上にするなどの用意があつた。

〔原島陽一〕

手足口病 てあしぐちびょう hand foot and mouth disease 発疹の性状と出現部位に特徴のある感染症で、おもにエンテロウイルスに属するコクサッキーウイルスの感染により、手足や口の中に水疱性の発疹が現れる疾患である。一九五七年にカナダのトロントで流行したときに病原ウイルスが発見された比較的新しい疾患であるが、その後世界各地でも流行がみられ、かなり普遍的な疾患であることが認められた。最初はコクサッキーウイルスA16型（CA16型）による流行がみられたが、近年はエンテロウイルス71型（E71型）による流行もあり、他の型のエンテロウイルスによる手足口病の散発例も報告されているところから、手足口病はCA16型によるものが多いが、他のエンテロウイルス（とくにE71型）の感染でもみられる症候群と考えられるようになった。

日本でも一九六五年（昭和四〇）に初めて報告され、六七年にウイルスが分離された。七〇年と七五年にはCA16型による手足口病が全国的に流行し、七三年と七八年にはE71型による流行がみられるなど、ほとんど毎年のように病原ウイルスを変えて発生している。

一般に、四歳未満の幼児に好発し、年長児には少なく、六か月未満の乳児はまれである。男児にやや多くみられ、成人にもまれにみられるが軽症である。ウイルスは咽頭から数日間、糞便からは一〇日前後排出され、おもに飛沫感染、ときに経口感染する。ウイルスは相対湿度の高いところで長く感染性を保つので、夏季に好発する。潜伏期は四〜六日で、通常前駆症状なしに急に発病することが多い。

水疱疹は手のひらや指の側面、かかとや足指の側面にまばらにみられ、その周囲は赤くくま取られ、米粒大からアズキ大の楕円形で、かゆみや痛みはない。破れることなく、二〜三日で内容液が吸収され、アズキ色または鉛色の斑点となって数日で完全に消失する。口中では、口唇の内側、頬の内側、舌、軟口蓋などに一、二個できるが、短期間のうちに破れ、赤くくま取った直径五、六mmの楕円形の潰瘍となる。食事のときにしみて痛むので食事を嫌がり、それで手足口病に気づくこともある。また、二〇％くらいは三八度C前後の発熱が二日ほど続く。症状が軽く、とくに治療を要しないものが多

いが、口の中の粘膜疹の痛みや発熱に対症療法を行うこともある。また、特別の予防法もなく、不顕感染が多いので隔離するまでもない。汚染された衣類や器物との接触を避け、手をよく洗い、乾燥に努める。予後良好な疾患であり、保育園や幼稚園でも登園禁止をしないのが普通である。

〔柳下徳雄〕

テ・アナウ湖 — Lake Te Anau

ニュージーランド南島の南西端に位置する氷食湖。南北に細長く、長さ六〇余kmに達し、西側に延びる四つの細長い湾入はフィヨルドの名でよばれる。この国第二の湖で、面積三四四平方km、標高二〇九m。最深部の深さ二七六m。フィヨルドランド国立公園内の景勝地で、南端部の町テ・アナウ（人口二五一〇、一八八）は観光地である。

〔浅黄谷剛寛〕

手焙 てあぶり 冬季に茶席や腰掛待合に置いて暖をとるための小形の火鉢。手炉ともいう。手焙の好みとしては、風炉師善五郎につくらせた「利休形」（『茶道室語』）が最初と考えられる。その種類としては瓦器のほか、陶製、金属製、木製に漆や蒔絵を施したものなどがある。

〔筒井絃一〕

手余地 てあまりち 江戸時代、農村荒廃による人手不足から、耕作が放棄された土地。江戸中期以降、凶作や飢饉、ならびに社会構造の変質から、農村で生活できなくなった人々は宿場や都市へと流出した。そのため農村では戸数・人口が減少し、農業労働力の不足から農村荒廃がおこり、手余地が増大した。手余地がわずかのうちは、村での惣作によってそれを耕作したが、手余地が増大すると、村の少ない労働力では耕作できなくなった。江戸幕府は、そうした状況に対処するため、八百姓政策を実施したり、また、一七九〇年（寛政二）に帰農令、一八四三年（天保一四）に人返令を発令したが、効果はあがらなかった。↓入百姓

〔川鍋定男〕

手編機 てあみき 家庭用編機。糸、毛糸などを、手で編むように編み上げる機械。手編みに近い味をもち、かつスピーディに編めるのが特徴。一五八九年に、イギリスの牧師ウィリアム・リーが、足踏み靴下織機を発明したのが初めだという。その後改良され、一八四九年、ペラ針を発明したことから需要が高まった。

日本では、一九二三年（大正一二）萩原まきによってガーター編機が発明されたのが最初である。二八年（昭和三）には、メリヤス針を使

った手編機が発明され、これが対立型編機の初めである。五二年（昭和二七）には、さらに操作を簡便にするために、並行型が生れた。五九年、現在の編機の原型ともいえる動針型編機が開発され、これにより対立型、並行型はほとんど生産されなくなった。その後は年ごとに各社で改良を重ねられ、それぞれに特徴をもった機種が出ていた。七〇年（昭和四五）に登場したパンチカード方式により、カードの穴を自動的に選針し、各種模様編みの操作が簡単になった。編み目の移動を自動的に行うレースキャリッジ、編み地の裏に配色糸が渡らないアーガイルキャリッジなども開発された。七七年にはマイクロコンピュータを採用した読み取り装置付き編機も出現し、製作範囲がさらに広がっていった。

デ・アンニチス Edmondo De Amicis

（一八六一～一八九六）イタリアの小説家。リグリア州オネリア（現インペリア）生まれ。一四歳でガリバルディの義勇隊に加わり、一八八六年のプロイセン・オーストリア戦争（クストーザの戦い）に出る。また一六歳でマンゾーニに自作の詩を送った文学少年であり、処女作『軍隊生活』（一八八六）の成功を機に軍籍を去り、統一イタリアの首都フィレンツェで文学に専念、『ナツィオーネ』誌を編集した。一八七四年以降移住したトリノの革新的な文学風土、数度の海外旅行などが民衆や年少者、社会主義に対する目を開かせた。自伝的要素、訓話、寓話などを用いた大衆的な手法、マンゾーニに倣った平易な文体などにより、当時もつとめ読まれた作家の一人である。代表作『クオレ』（一八八六）のほか、移民問題を扱った『洋上にて』（一八八六）、教育問題に取り組んだ『ある教師の物語』（一八八六）のほか、多くの旅行記、評論集などがある。↑クオレ

（望月紀子）

氏 てい 中国古代、甘肅省南部から陝西省南部にかけて（中心は武都、略陽）多くの部族に分かれて分布したチベット系の半農半牧の少数民族。五胡の一つ。紀元前一一年に前漢の武帝が氏族を攻撃して武都郡を設置して以降、中国の郡県に包含され支配されたが、その屈辱的差別的扱いに對し、しばしば反抗して民族自立の動きを示した。紀元後三世紀になると苻氏、楊氏、苻氏などの有力氏族が現れ、二九六年には苻氏が抑圧された関中地方の少数民族を糾合して晋王朝に反し、皇帝と称した。この反乱は三年後に鎮圧されるが、四世紀初頭、五胡十六国時代に入ると、少数民族の自立運動が活性化し、氏族も三五一年には苻健が長安で前秦を建国し、甥の苻堅は三七六年に華北を一時統一した。また、西域遠征の帰途涼州にとどまっていた三六六年に後涼を建国した呂光も氏族の出身である。↑五胡十六国

鼎 てい 中国の独特な三本足の容器。「かなえ」ともよばれる。三足内実で、動物の肉を煮るのに用いられた。その起源は彩陶文化期までさかのぼれるが、青銅器としては殷中期から現れ、漢代まで引き続き使用された。青銅器ではすべて耳が一对つけられており、横木を通して運搬するためのものであることを示している。扁足鼎は扁平な足を取り付けたもので、用途は同じである。方鼎は、箱型の容器に四本の実足を取り付けたもので、重さ八〇〇キを超す大型の器もつくられている。↑青銅器

鄭 てい 中国、周代の諸侯国の一。姫姓。周の宣王の弟の桓公友が、西周末に鄭（陝西省華県）に封ぜられたのに始まる。桓公は周の幽王が犬戎に殺されたとき（前七七一）王に殉じたが、その子の武公は周の東遷に従い、鄭と東虢の二国を滅ぼして河南省新鄭県の地に国を建てた。この武公とその子莊公は周の平王の卿士となり、周の国政を左右した。しかし、莊公の死後内紛が続いて国は衰え、さらに晋、楚の南北抗争の間において帰趨が定まらず、かろうじて国を保つ状態であった。紀元前六世紀中葉、一族の子産が執政となると、その内政外交の手腕

によってやや国力を持ち直したが、その死後はますます衰微し、紀元前三七五年、韓に滅ばされた。

手結 てい 高知県南東部、香美郡夜須町の一地区。手結峠の北西に位置する。手結湊は江戸期初頭に開削された堀込み港で、浦戸一室戸間の中間港であった。手結峠一帯は手結住吉県立自然公園となっている。

地 二万五千分の一地形図「手結」

T ティー 英語アルファベットの第二〇字。セム語アルファベットの最終字 tav を起源とし、ギリシア文字タウ(τ)を経由し、ラテン語に取り入れられたが、その字体は長い歴史を通じてほとんど変化していない。小文字 t はラテン文字の筆記体から発達して成立した。数学では、位相空間における閉鎖集合と点との関係を示す記号であり、また、重量の単位ではトン (ton) を表す (t と記す)。アメリカの軍事用語では練習機 trainer を意味し (T-11 など)、中世ローマ数字では一六〇を表す。T 定規などのように T 字形の意味によく使われ、to a T は「正確に」「完全に」という意味を表す。また、英語では T は、口語では not の省略形 can't = cannot として、詩では it の省略形 'tis = it is として用いられる。

デイ Clarence Day, Jr. (一八五五～一九三三) アメリカの随筆家。ニューヨークに生まれる。エール大学に学び、父の株式仲買業を手伝う。アメリカ・スペイン戦争に従軍して関節炎を患い、以後はほとんど病床にあって、『神と私の父』(一九三三)、『父との生活』(一九三三)など、一九世紀後半のニューヨークの家庭生活をユーモラスに描いた一連の自伝的作品で有名。『父との生活』は一九三九年脚色され、ブロードウェイで長期公演記録をつくった。

出居 てい 「いでい」とも読む。客に應對するために「出て居る」部屋の意で、寝殿造で庇や廊などの一画をくぎって接客用に充てた部分。出居の間ともいう。また、こゝで元服、袴着、裳着などの儀式も行われた。東三条殿のように中門に近い二棟廊に設けられる場合もあり、入口に近い場所でも客をもてなしたことを示している。中世の書院造でも客間を意味し、のちには、広く座敷をさすようになった。また、朝廷における賭弓、仁王会、相撲、弓場など、各種の儀式のために設けられる座をさし(出居の座ともいう)、そして、出居の座

に着いて、定められた儀式次第を行う人をもさした。⑧ 客間

D デイ 英語アルファベットの第四字。戸を意味する古代エジプトの象形文字を起源とし、セム文字 daleth およびギリシア文字デルタ(Δ)を経由して、ラテン文字において現在の字体となった。小文字 d はギリシア文字デルタ(δ)に対応し、ラテン文字の筆記体およびアンシャル体から生まれた。化学では重水素(ジウテリウム)の元素を表し、物理では密度あるいは直徑を、音楽では二音(ドレミ唱法のレ)を表し、D.C. はダ・カーポ(初めから)、D.S. はダル・セーニョ(その記号から)を表す。中世ローマ数字では五〇〇を示す。イギリスの貨幣単位ペニーは、ラテン語の denarius (古代ローマの銀貨で、『新約聖書』には penny と記されている) から d と略される。また、デシの略として、単位名の前について、一〇分の一であることを表す (d と記す)。英語では、d は口語で had または would の省略形 (You'd better = You had better など) であり、フランス語では d は de の省略形で、次に母音で始まる単語がくるときに用いられる。

T I ティーアイ ♡ テキサス・インスツルメンツ

D I デイアイ ♡ 景気動向指数

ティエガルテン Tiergarten 西ドイツ、西ベルリン東部の区。名称は「動物園」の意味で、同名の公園と西ベルリン動物園がある。区は東西ベルリンを分けるブランデンブルク門の西に隣接し、一九二〇年の大ベルリン市誕生前の都心六区の一つであった。東西に約三の「六月一七日大通り」が貫き、その中央にプロイセン・フランス戦争勝利の塔がある。第二次世界大戦前の一九三九年には人口二万四〇〇〇であったが、戦後の五〇年には一七万七〇〇〇、七七年には七万六〇七八に減少した。第二次大戦前、大使館街があり、ベルリンの外交地区であった。↑西ベルリン動物園

ディアギレフ Сергей Павлович Diaghilev (一八七二～一九二九) ロシアのパレエ団主宰者。三月一九日、ノボゴロドの貴族の家に生まれる。一八九八年友人と『芸術の世界』を創刊(一八九四)。ヨーロッパ各地に、美術のみならず音楽やバレエな

によってやや国力を持ち直したが、その死後はますます衰微し、紀元前三七五年、韓に滅ばされた。

手結 てい 高知県南東部、香美郡夜須町の一地区。手結峠の北西に位置する。手結湊は江戸期初頭に開削された堀込み港で、浦戸一室戸間の中間港であった。手結峠一帯は手結住吉県立自然公園となっている。

地 二万五千分の一地形図「手結」

T ティー 英語アルファベットの第二〇字。セム語アルファベットの最終字 tav を起源とし、ギリシア文字タウ(τ)を経由し、ラテン語に取り入れられたが、その字体は長い歴史を通じてほとんど変化していない。小文字 t はラテン文字の筆記体から発達して成立した。数学では、位相空間における閉鎖集合と点との関係を示す記号であり、また、重量の単位ではトン (ton) を表す (t と記す)。アメリカの軍事用語では練習機 trainer を意味し (T-11 など)、中世ローマ数字では一六〇を表す。T 定規などのように T 字形の意味によく使われ、to a T は「正確に」「完全に」という意味を表す。また、英語では T は、口語では not の省略形 can't = cannot として、詩では it の省略形 'tis = it is として用いられる。

デイ Clarence Day, Jr. (一八五五～一九三三) アメリカの随筆家。ニューヨークに生まれる。エール大学に学び、父の株式仲買業を手伝う。アメリカ・スペイン戦争に従軍して関節炎を患い、以後はほとんど病床にあって、『神と私の父』(一九三三)、『父との生活』(一九三三)など、一九世紀後半のニューヨークの家庭生活をユーモラスに描いた一連の自伝的作品で有名。『父との生活』は一九三九年脚色され、ブロードウェイで長期公演記録をつくった。

出居 てい 「いでい」とも読む。客に應對するために「出て居る」部屋の意で、寝殿造で庇や廊などの一画をくぎって接客用に充てた部分。出居の間ともいう。また、こゝで元服、袴着、裳着などの儀式も行われた。東三条殿のように中門に近い二棟廊に設けられる場合もあり、入口に近い場所でも客をもてなしたことを示している。中世の書院造でも客間を意味し、のちには、広く座敷をさすようになった。また、朝廷における賭弓、仁王会、相撲、弓場など、各種の儀式のために設けられる座をさし(出居の座ともいう)、そして、出居の座

に着いて、定められた儀式次第を行う人をもさした。⑧ 客間

D デイ 英語アルファベットの第四字。戸を意味する古代エジプトの象形文字を起源とし、セム文字 daleth およびギリシア文字デルタ(Δ)を経由して、ラテン文字において現在の字体となった。小文字 d はギリシア文字デルタ(δ)に対応し、ラテン文字の筆記体およびアンシャル体から生まれた。化学では重水素(ジウテリウム)の元素を表し、物理では密度あるいは直徑を、音楽では二音(ドレミ唱法のレ)を表し、D.C. はダ・カーポ(初めから)、D.S. はダル・セーニョ(その記号から)を表す。中世ローマ数字では五〇〇を示す。イギリスの貨幣単位ペニーは、ラテン語の denarius (古代ローマの銀貨で、『新約聖書』には penny と記されている) から d と略される。また、デシの略として、単位名の前について、一〇分の一であることを表す (d と記す)。英語では、d は口語で had または would の省略形 (You'd better = You had better など) であり、フランス語では d は de の省略形で、次に母音で始まる単語がくるときに用いられる。

T I ティーアイ ♡ テキサス・インスツルメンツ

D I デイアイ ♡ 景気動向指数

ティエガルテン Tiergarten 西ドイツ、西ベルリン東部の区。名称は「動物園」の意味で、同名の公園と西ベルリン動物園がある。区は東西ベルリンを分けるブランデンブルク門の西に隣接し、一九二〇年の大ベルリン市誕生前の都心六区の一つであった。東西に約三の「六月一七日大通り」が貫き、その中央にプロイセン・フランス戦争勝利の塔がある。第二次世界大戦前の一九三九年には人口二万四〇〇〇であったが、戦後の五〇年には一七万七〇〇〇、七七年には七万六〇七八に減少した。第二次大戦前、大使館街があり、ベルリンの外交地区であった。↑西ベルリン動物園

ディアギレフ Сергей Павлович Diaghilev (一八七二～一九二九) ロシアのパレエ団主宰者。三月一九日、ノボゴロドの貴族の家に生まれる。一八九八年友人と『芸術の世界』を創刊(一八九四)。ヨーロッパ各地に、美術のみならず音楽やバレエな



ディアギレフ

どロシア芸術の紹介に努めた。一九〇九年、ディアギレフ・ロシア・バレエ団を組織して、パリで旗揚げし、以降二〇年間その団長として活躍、ロンドン、パリ、モンテカルロ、ニューヨークなどで次々と公演を行った。ロシアの野性を象徴するニジンスキーの踊り、ストラビンスキーの音楽など、エキゾティズムとオリシズムを兼ね備えたロシア・バレエはヨーロッパの社交界、芸術界を巻き込み、時代をリードした。世界の舞踊界に大きな影響を与えた彼は、二九年八月一九日にベネチアで死去した。

ロシア・バレエ団に所属した美術家にバクスト、ブノア、ピカソ、マチス、ゴンチャロフ、エルンスト、音楽家にストラビンスキー、サティ、プロコフィエフ、プーランク、ミヨー、オリリック、舞踊家にニジンスキー、パブロワ、カルサピナ、マシーン、バランチンなど数多い。→ロシア・バレエ団

④R・バックル著、鈴木晶訳『ディアギレフ——ロシア・バレエ団とその時代』全二冊（二六、三六、リブポート）

ディアス Bartholomeu Diaz (Dias)

（四六〇—一五〇〇）ポルトガルの航海者。リスボン（リスボン）出身。父祖以来エンリケ航海王子に仕え、祖父ジョアンはバハドール岬まで、父ディアスはベルデ岬まで到達。バルトロメウは、伝説的なキリスト教国ブレスター・ジョンの国とインディアスへの道を求めて、一四八七年八月、王命により三隻の小型船でアフリカ探検の航海に出た。これまでディオゴ・カオンの到達した極限を越えて、サンタ・ヘレナ（セント・ヘレナ）湾に達し、暴風のため一三日間漂流、海岸を離れたので、南東から東に転進したが、陸地を見ず、さらに北に進路を転じて、八年二月三日フレッシュ湾（アングラ・ドス・バケイロス）に到達した。知らぬまにアフリカ南端を東に回航していたことになる。帰途、南西端に立ち寄り、風浪高く、カーボ・トルメン



P.ディアス

トソ Cabo Tortuoso（嵐岬）と命名して帰航の途につき、同年二月リスボンに帰着。国王ジョアン二世は、この岬の名をカーボ・ダ・ボア・エス・ペランサ Cabo da Boa Esperança（希望岬）と変更。ついにアフリカ南端を東へ回航する航路が発見され、のちバスコ・ダ・ガマのインド航路発見の端を開くことになった。

その後、ガマがインドへの航海の命を受けると、彼もその準備に参画し、始めはその航海にも加わり、九七年七月リスボンを出発した。のちポルトガルのインド経営にあたって、カブラルの指揮する大船団（一三隻、乗員一二〇〇人）に彼は船長として加わり、弟ディオゴ・ディアスらとともに一五〇〇年三月八日リスボンを出発。途中たび重なる暴風雨に船団は損傷離散したが、四月二日偶然にブラジルを発見。一か月後インドに向かったが、南大西洋で暴風雨に会い、船四隻を失い、同時にディアスもここで海難死した。

④山中謙二著『地理発見時代史』（二六六、吉川弘文館）

ディアス Porfirio Diaz (一八三〇—一九一五)

メキシコの将軍、独裁者。大統領（在任一八八〇—一八八六、一八八七—一八九一）。同国南部のオアハカ州出身のメステイソ（混血）で、幼くして父を失い種々の労働を体験したのち、対米戦争（一八四七—一八五五）を機に軍人となった。一八五四年に始まる自由主義革命（レフォルマ）を支持し、とくにフアレス大統領の指導する内戦（一八五七—一八六〇）および対仏戦争（一八六二—一八六七）で、自由派の軍人として活躍した。戦後フアレスら文治派と対立。フアレス死後の一八七六年、旧革命軍や、教会財産没収政策などによって成長してきた新地主層などの支持を背景に、武力で権力を握り、一九一一年メキシコ革命によって追われるまで長期独裁政治を続けた。パリへ亡命、同地で没す。大地主階級を保護し、鉄道、鉱山業を中心

に外国資本を導入、メキシコ経済の急速な発展に成功したが、反面、政治的自由は許されず民衆運動は弾圧され、ほとんどの農民は土地を失い貧富の差は拡大し、メキシコ経済の外国資本への従属化は決定的となった。

ディアス Porfirio Diaz 「離散」

を意味するギリシア語。おもにヘレニズム時代以降、パレスチナ以外の地に住むユダヤ人およびその共同体をさす。「離散ユダヤ人」「離散の地」の意にも用いられる。離散ユダヤ人の大部分はヘレニズム・ローマ文明の支配下に置かれ、離散の地の諸国におけるユダヤ人の経済活動は特定の職業に限定されることなく諸分野に及んでいた。彼らはユダヤ教を堅持しながら異なる共同体を組織していたため迫害を受けた。イエスの使徒パウロも離散ユダヤ人の出身であり、初代キリスト教会はディアスボラのユダヤ人とその会堂を拠点として伝道活動を行った。『旧約聖書』の「七十人訳聖書」は、アレクサンドリア周辺に住むディアスボラのためになされた翻訳である。

低圧線

ていあつせん 低（電）圧の配線をいう。一般に使用される電圧は、七〇〇ボルトを超える特別高圧、七〇〇ボルト以下低圧までの高圧、さらに低圧と三段階に区分されている。低圧は直流と交流とで扱いが異なり、通産省令による「電気設備に関する技術基準」では「直流では七五〇ボルト以下、交流では六〇〇ボルト以下」となっている。

低圧線に使用される電線は、六〇〇ボルトビニル絶縁電線、六〇〇ボルトポリエチレン絶縁電線、六〇〇ボルトフッ素樹脂絶縁電線、六〇〇ボルトゴム絶縁電線および屋外用ビニル絶縁電線である。ケーブルやコードを使用することもあるが、電気用品取締法により公称断面積一〇〇平方メートル以下の電線と七心以下のケーブルとコードとは甲種電気用品に指定され、安全のための規制が強化されている。屋内での配線はすべて低圧線を原則とし、施設方法としては碍子引き工事、合成樹脂管工事、金属管工事、ダクト工事、ケーブル工事などがある。また屋外では、架空線とケーブルの工事がある。

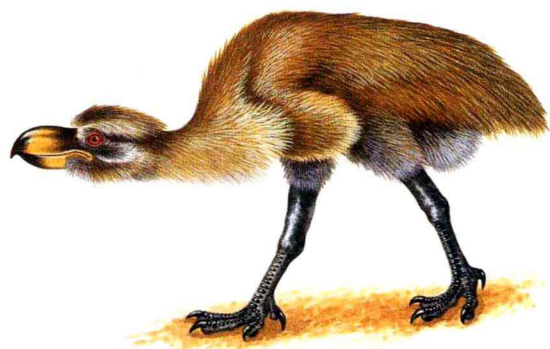
ディアドコイ diadochoi

ギリシア語で「後継者」の意。とくにアレクサンドロス大王の急逝（前三三）後、それぞれ大王の後継者を呼号してその遺領を争ったマケドニアの部将たちをいう。またその抗争をディアドコイ戦争（前三三—前三〇）とよぶ。

抗争は、まず中心勢力であったペルディッカスおよびエウメネス、摂政アンティパトロス、アンティゴノス（一世）らの間に繰り返された（前三三—前三〇）が、この段階では遺領の一体性を保全しようとする理念（統一派）が強かった。このころまでに大王の弟フィリップス三世アリダイオス（前三七）も太后オリンピアス（前三三）も弒された。ついで、勝ち残ったアンティゴノスに、リシマコスやカッサンドロス、プトレマイオス（一世）、セレウコス（一世）らの分離派が対抗。紀元前三〇一年イブソス（小アジア）の戦いに後者が勝って、旧帝国保持の夢が完全に失われた。この間、大王の妃ロクサネと遺児アレクサンドロス四世とが毒殺されて大王の王統が絶え（前三〇／二三）、前三〇六年以降ディアドコイらは一斉に後継者としての王号をとなえるに至る。この段階で王朝の形成が始まったといえよう。その後、抗争はなお分離派相互の間で熾烈に続けられ、前二八一年クルペディオ（小アジア西部）でリシマコスが敗れて、過渡的なトラキア王国が滅亡した。最終的には、アンティゴノス二世のマケドニア、プトレマイオス一世のエジプト、セレウコス一世のシリアというヘレニズム三国が確定した。

ディアトリマ Diatriama

鳥綱ディアトリマ目ディアトリマ科に属する化石鳥の総称。この科 Diatryma はディアトリマ属 Diatryma の四種よりなる。そのうちの一種は、ほとんど完全な骨格が北アメリカの第三紀初期の地層から発掘された。頭高約二倍、大きな足をもった巨大な鳥で、体はヒキドリに似ていたと思われるが、足指は四本あった。ディアトリマの最大の特徴は、体と不釣り合いに大きな頭骨と、嘴で、嘴を含めた頭骨の全長は四八センチ、嘴は長さ二二・五センチ、嘴高一六・五センチに及ぶ。この鳥がすんでいたのは、いまから六五〇〇万—五五〇〇万年前（第三紀の始新世のころ）と推定され、化石が北アメリカ、ドイツ、フランスで発見されている。その生態については形態から推定するほかないが、地上生で、明らかに飛ぶことはできなかった。多くの人は、ディアトリマの巨大な嘴は肉食のためであったと考えている。しかし、一部の学者は、ディアトリマとオウムの



嘴が比較的よく似ていることから、ディアトリマは植物食で、堅い果実や芽をかみちぎって食べていたと想像している。とにかく、ディアトリマの繁栄していた時代は、ちょうど恐竜の時代が終わり、哺乳類はまだ比較的小形であったころで、この大きな鳥は怖いものなしに悠々と暮らしていたことであろう。ディアトリマの類縁関係ははっきりしていない。しかし、いちばん類縁がありそうなのは、南アメリカの第三紀中期から発見されるフォルロハコス *Phorohakos* である。この鳥はツル目ノガンモドキの仲間、地上にすみ、ディアトリマのように巨大で飛ぶことはできず、頭と嘴も大きかった。ディアトリマもフォルロハコスも、子孫を残さずに絶滅した。

《森岡弘之》

ディアナ Diana ローマ神話の女神。ギリシア神話のアアルテミスと同一視されている。もっとも有名な崇拜地はローマ近辺のネミ湖畔にあるアリキアで、「森のディアナ」（ディアナ・ネモレンシス）という名で、森の神ウィルピウスとともに祀られた。そこを守る神官は「森の王」（レクス・ネモレンシス）とよばれ、その地位を望む者は神官に決闘を挑んで相手を殺せば就任が認められた。この野蛮な習慣のため、ディアナは人身御供を強要するタウリスのアアルテミスと同一視されたものらしい。またウィルピウスは「二度生きた者」を意味するため、ギリシアの英雄テセウスの息子にしてアアルテミスの信奉者、また死してのちよみがえったときれるヒッポリトスとみなされた。ディアナ神のちにセルウィウス・トゥリウス王によって、ローマのアウエンティヌス丘の神殿に移され、おもに庶民や奴隷の崇拜対象となった。また元来、樹木の女神であり、農民の崇拜を経て、多産の神ともなった。さらに月の女神ともみなされ、ときには地下の女神ヘカテと混同された。英語読みはダイアナ。↓アアルテミス（小川正広）

ディアナ Diana スペインの作家ホルヘ・モンテマヨールの牧人小説。一五五九ごろバレンシアで出版。正式な題は *Los siete libros de la Diana*（ディアナの七つの書）。理想化された自然のなかでプラトニックな愛を歌った作品は、これ以前にもしばしばみられたが、それはみな韻文で、モンテマヨールの散文作品を契機として、スペイン文学に牧人小説のジャンルが根をおろした。理性の限界を超えた愛の葛藤を、音楽性豊かな詩的散文でつづったこの作品は大成作を収め、セルバンテスやロペ・デ・ベガらの追従作家を生んだ。一六世紀のうちに英訳と仏訳、一七世紀には独訳本も出版された。

ディアヌ・ド・ポアチエ Diane de Poitiers（一五二六～一五六〇）フランス国王アンリ二世（在位一五五七～一五七四）の寵妾。貴族の娘に生まれ、ノルマンディー地方の代官と結婚したが、夫の死後、二〇歳の年上ながらアンリ国王の寵を終生受けることになった。長身、豊かな胸、清純な顔立ちで当代随一の美女とたたわれ、王妃カトリクス・ド・メディシスと権勢を競った。しかし、アンリとの間に子はなく、やがて子だくさんのカトリクスに力に屈して、寂しい晩年を送るに至った。ロアール河畔のシュノンソー城、ショーモン城は彼女の手で修理拡張され、アネ城は彼女の計画で建築されたものである。↓アンリ（二世）

《榎原晃三》

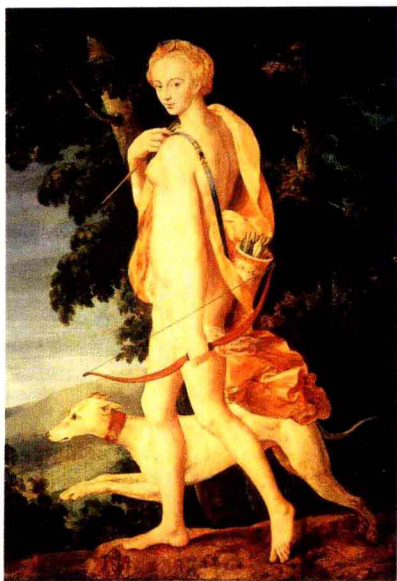
ディアヌ・ド・ポアチエ Diane de Poitiers（一五二六～一五六〇）フランス国王アンリ二世（在位一五五七～一五七四）の寵妾。貴族の娘に生まれ、ノルマンディー地方の代官と結婚したが、夫の死後、二〇歳の年上ながらアンリ国王の寵を終生受けることになった。長身、豊かな胸、清純な顔立ちで当代随一の美女とたたわれ、王妃カトリクス・ド・メディシスと権勢を競った。しかし、アンリとの間に子はなく、やがて子だくさんのカトリクスに力に屈して、寂しい晩年を送るに至った。ロアール河畔のシュノンソー城、ショーモン城は彼女の手で修理拡張され、アネ城は彼女の計画で建築されたものである。↓アンリ（二世）

ディアナ Diana ローマ神話の女神。ギリシア神話のアアルテミスと同一視されている。もっとも有名な崇拜地はローマ近辺のネミ湖畔にあるアリキアで、「森のディアナ」（ディアナ・ネモレンシス）という名で、森の神ウィルピウスとともに祀られた。そこを守る神官は「森の王」（レクス・ネモレンシス）とよばれ、その地位を望む者は神官に決闘を挑んで相手を殺せば就任が認められた。この野蛮な習慣のため、ディアナは人身御供を強要するタウリスのアアルテミスと同一視されたものらしい。またウィルピウスは「二度生きた者」を意味するため、ギリシアの英雄テセウスの息子にしてアアルテミスの信奉者、また死してのちよみがえったときれるヒッポリトスとみなされた。ディアナ神のちにセルウィウス・トゥリウス王によって、ローマのアウエンティヌス丘の神殿に移され、おもに庶民や奴隷の崇拜対象となった。また元来、樹木の女神であり、農民の崇拜を経て、多産の神ともなった。さらに月の女神ともみなされ、ときには地下の女神ヘカテと混同された。英語読みはダイアナ。↓アアルテミス（小川正広）

ディアナ Diana スペインの作家ホルヘ・モンテマヨールの牧人小説。一五五九ごろバレンシアで出版。正式な題は *Los siete libros de la Diana*（ディアナの七つの書）。理想化された自然のなかでプラトニックな愛を歌った作品は、これ以前にもしばしばみられたが、それはみな韻文で、モンテマヨールの散文作品を契機として、スペイン文学に牧人小説のジャンルが根をおろした。理性の限界を超えた愛の葛藤を、音楽性豊かな詩的散文でつづったこの作品は大成作を収め、セルバンテスやロペ・デ・ベガらの追従作家を生んだ。一六世紀のうちに英訳と仏訳、一七世紀には独訳本も出版された。

ディアヌ・ド・ポアチエ Diane de Poitiers（一五二六～一五六〇）フランス国王アンリ二世（在位一五五七～一五七四）の寵妾。貴族の娘に生まれ、ノルマンディー地方の代官と結婚したが、夫の死後、二〇歳の年上ながらアンリ国王の寵を終生受けることになった。長身、豊かな胸、清純な顔立ちで当代随一の美女とたたわれ、王妃カトリクス・ド・メディシスと権勢を競った。しかし、アンリとの間に子はなく、やがて子だくさんのカトリクスに力に屈して、寂しい晩年を送るに至った。ロアール河畔のシュノンソー城、ショーモン城は彼女の手で修理拡張され、アネ城は彼女の計画で建築されたものである。↓アンリ（二世）

《榎原晃三》



ディアナ 獵犬を従え、左手に弓を持つ姿の「狩りのディアナ」フォンテンブロー派 1550～60年ころ 油彩 パリ ルーヴル美術館



ティワナコ文化
太陽の門(高約3 m)
上部の特異な装飾。中央に杖か笏と思われるものを持った神が立ち、左右には有翼の48の神像が並んでいる

チョバタ、ロブレス・モコなどの各様式を生んだが、その後まもなくしてワリを中心に類ティワナコ的な性格の都市文明が興り、それがペルー全土に拡大するに至った。〈増田義郎〉

提案制度 ていあんせい suggestion system 従業員の発案を企業側に提案させ、一定の審査によって実現可能なものを採択し、採択された提案に対して賞を与える制度。提案事項は、機械、工具、作業方法、事務手続、製品などの改善やそのためのアイデア等、提案者の業務に関連するものもとより、企業内のあらゆる問題に及んでよい。提案箱に投入された提案は、一定の期間ごとに提案審査機関によって審査され、評価される。提案審査機関は、公正を期するため、労使で構成することもある。賞としては、賞金、表彰、社内報発表などが用いられる。従業員の参加意欲を高め、同時に業務の改善に資するという効果がある。〈森本三男〉

程頤 てい い (1033—1107) 中国、北宋の儒学者。字は正叔。伊川先生とよばれた。兄の程顥(明道)とともに二程といわれる。洛陽



程頤 画像『三才図会』
東京 国立公文書館

の人。一四歳ごろ兄とともに周敦頤(濂溪)に従学。二四歳、国子監(大学)に入り、教官であった胡瑗(安定)の試問に対して、『論語』にみえる顔子の好んだ学を論じ、「学は以て聖人に至るの道なり。聖人学んで至る可きか。曰く然り……」という答案を提出した。宋学の本質を端的に示す名言であった。五四歳、哲宗の侍講となり、厳正な態度と高い識見とによって侍講職の地位を重くしめたが、その厳しさが天子の側近や蘇軾(東坡、四川省の人)らの文人派とあわず、程頤の洛党と蘇軾の蜀党との対立を生み、また王安石の新法に反対したために、新旧両党の党争に巻き込まれて四川に流され、赦免後も著書を廃棄せられるなど、晩年まで多難であった。

程頤は理気二元論的な発想をたて、物の世界、現象の世界は陰陽の気によって成立するものとしたが、陰陽の気の背後に陰陽を陰陽たしめる所以の理(すなわち道)を考えた。理は自然界の物の理法であると同時に人間界の理法、人倫の理でもあった。人の性については、兄の頤が人の生命の働きをそのまま性としたのに対して彼は、気による生々にかかわる面を「氣質の性」と名づけ、これとは別に天から与えられた本来の性である「極本窮源の性」を考える。それは人の理そのものであり、善であるが、「氣質の性」は身体を構成する気の清濁によって善悪が分かれるとした。そこで学問・修養の努力が必要となるが、その方法としては、心を敬という緊張状態に保つ「居敬」と、事物の理を窮め知る「窮理」とを説いた。以上の程頤の学説は南宋の朱熹(朱子)によって継承され、朱子学として大成された。朱熹がもっとも多く取り入れたのは程頤の学説で、朱子学は程朱学ともよばれる。著書に『易伝』『経説』があり、文集・語録とともに『二程全書』に収められている。↓程頤

↓居敬窮理 ↓程朱学
市川安司著『程頤』(中国の思想家 下巻) 所収・一九三・勁草書房) ▼同著『程伊川哲学の研究』(二六四・東京大学出版会) ▼市川安司他訳注『程明道・程伊川』(朱子学大系 2 朱子の先駆 上) 所収・二六六・明徳出版社)

程伊川 てい いせん 程頤
丁一権 てい いけん/チョンイルゴン (一九七一—)

大韓民国の軍人、政治家。咸鏡北道慶源生まれ。満州国奉天軍官学校を経て、日本の陸軍士官学校に留学。一九四五年、満軍大尉としてソ連軍に捕らえられたが脱走帰国。南下して軍事英語学校卒業後、国防警備隊、韓国陸軍の幹部を歴任し、五〇年の朝鮮戦争には三軍総司令官として参戦した。一時アメリカに留学したのち、軍首脳部に返り咲き、五六年合同参謀会議議長となったが、五七年退役して、駐トルコ、フランス、アメリカ大使を務め、六三年外務部長官となる。六四〜六七七年にわたり国務総理として朴大統領を補佐し、七三年国会議長となった。八〇年第五共和国の発足にあたり旧政治家として追放された。〈玉城 素〉

定員管理 てい いんかんり 企業等の組織体が、その業務を円滑に遂行するために必要でしかも十分な人員を確保し、維持するための体系的施策をいう。定員は、単に総体としての量的人数を問題にするのではなく、業務内容に応じた質的構成、年齢に配慮した世代構成、業務の繁閑に対応できる柔軟さを含んだものでなければならない。また、技術革新などに伴う所要能力の変化と適応の方法、時間の経過に伴う保有能力の変化にも注意しなければならない。一般に、ライン部門の定員は工数計算と管理可能人員の範囲から合理的に設定しうが、スタッフ部門についてはこのような算定が困難なため、定員管理が放漫になりやすい。〈森本三男〉

ディウ Dia インド西部、ゴア・ダマン・ディウ中央政府直轄地を構成する一地区。アラビア海に面するカーティアール半島南端に位置する。ジウともいう。東西一〇〇、南北三三の、人口二万三〇〇〇(一九七)。一五三四年に

ポルトガルの植民地となり、ゴアやダマンとともに東洋貿易の拠点として発展したが、イギリスの勢力拡大とともに衰退した。独立後、インド政府は再度にわたって返還を要求したが、ポルトガルは応じなかったため、一九六一年にインド軍が進駐し、激しい戦闘のうえ、六二年インドに併合された。産業は漁業、製塩業のほかみるべきものはない。島には飛行場があり、カトリック教会や美しい海岸線が観光資源となっている。〈貞方 昇〉

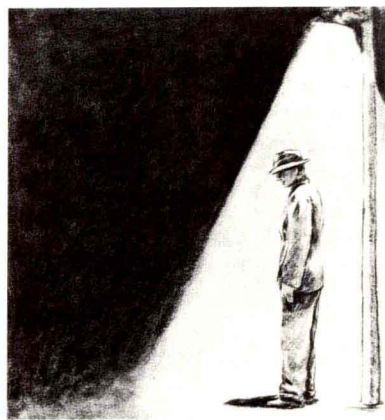
ディ・ウェルト Die Welt 西ドイツの代表的新聞。一九四六年ハンブルクのイギリス占領軍の手で創刊されたが、五三年アクセル・シュプリングャー社に買い取られ、保守的独立紙として発展した。紙面は洗練されて読みやすく、英米型の客観報道主義を守って、他のドイツの新聞よりもニュースと意見の区別がはっきりしている。従来ハンブルク、ベルリン、エッセンの三都市で発行されてきたが、経営悪化により七〇年代末に編集局をボンに移し、最新技術導入による合理化を図った。その後も経営不振が続き、八一年シュプリングャー社の株二六%がその対抗社であるブルダ・グループに移管された。発行部数は日刊で二四万四八〇〇部、日曜紙は四三万八八〇〇部(一九七)。〈鈴木ケイ〉

DIE WELT

ディ・ウェルト 題字

ディエゴ Diego de Santa Catalina (一九三六—) スペイン人のフランススコ会宣教師。のち王立聖ヤコボ修道院長。一六〇一年(慶長一五)徳川家康が同会のムニョスをスペイン王に派遣した答礼として、一五年(元和一)国王フェリペ三世の親書を携えて来日した。家康に謁見を願い出たが、すでにキリスト教禁止令が发布され、キリシタンやスペインに悪感情を抱いていた家康は拒絶した。また秀忠も一行を冷遇し、厳重な監視下に置いたため、ついに翌年使命を果たせず帰国した。この冷遇は、後のメキシコ貿易計画失敗の一因となった。〈磯見辰典〉

ディエゴ Gerardo Diego (一八九一—) スペインの詩人、文学者、音楽家。サンタンデール生まれ。詩風は初期の大胆な前衛詩から古典的な詩まで幅広い。奔放なイメージを駆使した『泡沫の手引書』(一九四)、完璧なフォームで



TAT
TAT日本版試案の一例。被検者にこのような絵画を見せて検査を行う。臨床心理学研究会編（提供：金子書房）

カステイリヤの地の感動を歌った『人間の詩』（二五五）、古典美の頂点を極めたソネット集『真実のひばり』（二四四）など。第二次世界大戦後も厳粛な『神聖詩』から、闘牛を歌った軽快な『運めしは死』、音楽との深いかわりを示す一連の作品など、伝統と刷新の総合ともいえるべき多様な世界をつくりあげている。卓越した技巧と美に対する感受性、気品が渾然一体となっている。ほかに、時代の証言ともいえるべき近代詩の編著『現代スペイン詩抄』（一九三）がある。アカデミー会員。〈有本紀明〉

ディエゴ・スアレス Diego Suardes アフリカ南東部、マダガスカル北部の港湾都市。別称アンチラナナ Antiranana。アンブル岬の南約三〇キロに位置する。人口四万〇四四三（二七五）。一九世紀末フランスが占領し、フランスの海軍基地として発展した。造船、せっけん、食品加工などの工業が立地する。〈林 見史〉

DAC ディーエーシー 開発援助委員会

ティエス Tries 西アフリカ、セネガル西部にある商工業都市。首都ダカールの東方六〇キロの鉄道分岐点にあり、ラッカセリ産地のティエス地方の中心都市で、セネガル第三の都市である。人口一十七万七三三三（二七五）。交通の要所、ラッカセイ、穀物の集散地として発展し

た。落花生油、製靴、機械のほか、近郊で産出する燐鉱石加工などの工業がある。〈藤井宏志〉

ディエップ Dieppe フランス北部、セーヌ・マリティーム県の港湾都市。人口三万六四八六（二九三）。パリの北西一八〇キロ、イギリス海峡に面し、白い断崖のとぎれた入り江のアルク川河口に位置する。古くから漁港として栄え、また貿易港（バナナの輸入量はフランス最大）、イギリス南部のニューヘブレンに渡る客船の発着地でもあり、海水浴場としても名高い。工業は電気、造船、自動車、化学などが発達する。北西の町を臨む崖の上に一五〜一七世紀の古城があり、美術館になっている。〈高橋伸夫〉

TAT ティーエーティー thematic apperception test 主題統覚検査または絵画統覚検査と訳され、わが国でも広く用いられている。マレー H. A. Murray を中心とするハーバード大学の研究グループが考案した代表的な投影法の一つで、いくぶんあいまいな絵画を見せて、そこに描かれている人物や状況から想像による物語をつくらせ、その内容におのずと現れるその人独自の人格特性を把握しようとする方法である。

マレーの基本構想は、そうした物語のなかで、被検者が自分と同一視していると思われる主人公 hero が示す欲求 need と、そうした欲求を促進したり阻止したりする形で環境が働きかける圧力 press との関係によって、その物語に備わる主題 theme を把握し、さらに物語の結末の幸・不幸、登場人物の示す感情調などにも注目して、被検者の人格特性を分析する、というものである。その後、ワイアット E. Wyatt、ベラック L. Bellak などによって独自の分析方法が提起されている。

また、ある程度具体的な人物や場面を描いた絵画を用いるので、適用する対象や目的に応じた異なる絵が必要であり、ハーバード版で最初成人男子用二〇枚であったが、のちに女性用、少年・少女用、臨床用などの差し替え用カードが加えられたし、限定された目的のためのシリーズ、異なる文化圏での独自のシリーズなどがつくられた。わが国でも、早稲田大学版「絵画統覚検査」などの日本版が用いられている。現在では一般に、こうした変法を含めて TAT とよんでいる。↓投影法 〈富田正利〉

DAT ディーエーティー ①デジタルオーディオテープレコーダー



ティエポロ『アントニウスとクレオパトラの出会い』1747-50年 フレスコ ベネチア パラッツォ・ラビア 壁画『クレオパトラ物語』のうち。手前に見える現実の柱と、描かれた構造物や人物が混然一体となって、目だましの効果を生み出している

DAD ディーエーディー ①デジタルオーディオディスク

DNA ディーエヌエー デオキシリボ核酸 deoxyribonucleic acid あるいはデオキシペンントース核酸 deoxyribose nucleic acid の略語。両者は同じものであるが、いまでは前者を用いることが多い。遺伝子の本体である。↓デオキシリボ核酸 ↓核酸 ↓遺伝子 〈笠井献一〉

TNT ティーエヌティー ①トリニトロトルエン

DF ディーエフ ①無線方位測定機

ティエポロ Giovanni Battista Tiepolo (一六九六-一八四〇) イタリア、ベネチア派の画家。四月一日ベネチアで受洗（正確な誕生日は不明だが三月五日ごろ）。一八世紀最大の装飾画家の一人であると同時に、ジョット以来のイタリア絵画の最後を飾る巨匠でもあった。海商の子として生まれ、初めラザリーニ Gregorio Lazzarini のもとで修業するが、セバスチアーノ・リッチやピアツェッタ、とくに一六世紀のペロネーゼから多くを学んだ。最初の確かな作品が『イサクの犠牲』（一七五二）。ベネチア、オスペダレット）であり、一七二七年画家組合に登録、一九年フランチェスコ・グアルディの姉チエチアと結婚する。ベネチアのほか、ウディネ（一七三六）、ミラノ（一七三三）、ベルガモ（一七三三）など北イタリアの諸都市で活躍、初期の暗い色調を一掃し、明るく色彩豊かな画風を

確立する。ベネチアのパラッツォ・ラビアの壁画『クレオパトラ物語』（一七五二）では、このころから絶頂期に入る。五〇年にはドイツのウエルツブルク宮に招かれ、建築と一体となった壮大な天井画『世界の四大陸』などを制作した。五五年ベネチアのアカデミアの院長に就任。ピチエンツァのピッラ・バルマラーナの壁画やストラのピッラ・ピサーニの天井画を完成させたのち、六二年スペインのカルロス三世の招きで息子とともにマドリッドに赴く。王宮の王座の間の天井画制作がおもな仕事であったが、アラソフエスのサン・パスクアレ聖堂にも七点の祭壇画を描いた（ただしこの祭壇画はやがてメングスの作品に取り替えられてしまう）。神話や聖書の物語を題材にした軽快な筆致のフレスコ画でとくに有名であるが、油彩画も多数制作しており、また『気まぐれ』などのエッチングの連作も残している。近代画家の先駆者であるゴッダティエポロの壁画やエッチングから多くの影響を受けたことは特筆されてよい。一七七〇年三月二七日マドリッドで没した。なお、息子のドメニコ Giovanni Domenico Tiepolo（一七四六-一八〇四）も画家で、一七四五年ごろから父の助手として働いているが、父に忠実な画風なため判別がむずかしい。版画家としても『エジプトへの避難』（一七五三）の連作などを残している。〈篠塚三男〉

DM ディーエム ⇨ダイレクト・メール

DME ディーエムイー distance measuring equipment の略称で、距離測定装置のこと。電波伝播の定速性を利用し、航空機と地上局間の電波の往復時間からその間の距離を連続して自動的に算出する装置。機上のインテロゲーターと地上局のトランスポンダーから構成されている。インテロゲーターから特定の地上局を指

庭園 ていえん

- 〔日本の庭園〕 古代／奈良時代／平安時代／鎌倉時代／室町時代／安土桃山時代／江戸時代／明治以降
- 〔中国の庭園〕 種類／歴史
- 〔西洋の庭園〕 エジプト庭園／イタリア庭園／フランス庭園／イギリス庭園／ドイツ庭園／スペイン庭園／アメリカ庭園
- 〔日本のおもな庭園〕

大自然に擬して人間がつくった小自然の景観。原初は神を祀る儀式の場であったり、農作業などの実用の場であったりしたが、文化が進むにつれて、人間と自然とのかわりを求めて、住居を取り巻く環境として発達した。

庭園にあたることばは、ヨーロッパではゲルマン語系で表現される。すなわち garden, jardin, jardin, giardino, Garten など、これらの語の基礎となる共通の語根は gher- で、土地に関する支配ないし囲い込みを意味している。これは村落や部族の共同体の生活のなかで家畜を飼育する場所であったが、のちに王や貴族のための蔬菜、果樹、森林園をさすようになったことを示している。それが文化の発達に伴って、実用目的から離れて花や緑樹を植え、憩いの場として装飾的な地割や植栽を施して、観賞を目的とした庭園へと発達していった。

日本で「庭園」ということばが使われるようになるのは、西洋文明が入ってきた明治四〇年（一九一七）ころからで、garden の訳語としてであり、その歴史は浅い。庭園の「庭」という字は、元来中国においては堂前の場所、つまり屋前の平坦な場所をさしたから、日本に伝わったとき、一木一草一石もない広場（祭政を行う場所）を『日本書紀』では「庭」、『古事記』では「邇波」「二八」といったが、これは後世のいわゆる庭園ではなかった。

定して一〇〇メートル帯のパルス電波が発信されると、地上局のトランスポンダーは受信と同時に質問波と六三・ヘルツ離れた周波数による応答電波を発信する。機上の装置ではこれを受信し、コンピュータにより二つの電波の時間差を測定し、この時間差を距離に換算して操縦席前の指示器にデジタル表示する。

航空機から地上局設置点までの直線空間距離を測定するもので、地上局の方位を知ることではできない。そこで通常、VOR（全方位無線標識）と組み合わせて方位と距離を同時に測定し航空機の位置を求める。これをVOR/DME方式といい、一九六〇年にICAO（国際民間航空機構）の国際標準方式として採用された。DMEは比較的新しい装置であるが、近距離航

日本の庭園

自然と深いかわりをもつ日本の庭園は、その自然や四季の移ろいとともにつくられ、生き続けてきた。国土の周囲を海洋で取り囲まれている日本の庭園は、その広大な海や湖沼を表現するために池泉を多く設け、中世のころには庭園のことを「園池」というようになった。『日本書紀』では「園」「苑」などが用いられている。同時代、庭園にあたることばに「前栽」があり、また奈良期から鎌倉期ごろまで用いられていたんだえ、江戸期に復活されたことばに「林泉」がある。このほか庭園を意味することばとしてわが国で用いられてきたものには、「坪」「池庭」「泉石」「山水」「假山」「枯山水」「石壺」「蓬壺」「泉水」「水閣」「水石」「御庭」「御園」などがある。

日本の庭園は大きく類別すると、次の三つに分けられる。

- (1) 池庭（池泉） 舟遊式、回遊式、借景式
- (2) 枯山水 禅院式、池庭式
- (3) 露地 草庵式、書院式

また、庭の構成要素としては、①池と水、②石組、③自然の風景を再現するための築山、野筋、植栽、④付属物としての飛石、敷石、石灯籠、垣根などの類がある。以下、日本の庭園の変遷を時代を追ってみることにしよう。

〔古代〕 古代の人々は、大自然が神仏のつくったものとするべ、庭は神仏に捧げるものと考えた。『万葉集』に、「庭なかの阿須波の神に小柴さし吾はいはむかへりくまでに」（第四三五〇歌）などしばしば出てくる「庭」は、家の前の開けた所で、神を祀る場所、斎庭（忌庭）とよばれ、隅に梅や橘が植えられていた。現在のような意味での庭はシマとよばれ、この島は離れた地であり別世界を意味した。この場合、島を取り巻く池は海の象徴で、池と島が日本の庭の原型である。また古代、神々は天空から地上の高い所に降臨すると信じられ、その際に大きな枝ぶりのよい木とか大きな石に

神が来臨すると考えた。日本の庭園が、外国のそれと比べて、みごとな石組を特色とするのはこれに由来する。

石組の原初の形とみられるものに「環状列石」や、石を神格化した「磐座」「磐境」がある。環状列石は有史以前の先住民のつくったものであるが、その規模は直径二〇五〇センチくらいで、直立した石が円形あるいは楕円形に並んでいる。個々の石の高さは一ないし二層のものが多く、環状の石の一つはかならず子午線の方向をさしている。このことから環状列石は漁に関係あるとか祭祀に関係あるともいわれ、また、北海道積丹半島の直径二層の環状列石から人骨を葬ったとみられる燐が採取されたところから墳墓説も行われたが、まだ定説となっていない。

磐座は祖霊祭祀やその地の守護神が宿る場所として、山や山腹にある巨石を崇拝したことから始まる。やがて祖霊の降臨する場所あるいは聖地に巨石をいくつも据えて崇拝するようになった。これが磐境である。すなわち、磐座は自然の巨石崇拝、磐境は人間の手によって設けられた巨石崇拝で、縄文末期から弥生初期にかけて多くつくられた。

ついで弥生後期から飛鳥時代にかけて現れるのが神池・神島である。これも祖霊崇拝や土地の守護神の祭祀と深いかわりがあり、広い池に島々が点在する形態は庭園のようにみえるが、実は庭園ではない。古代、異民族や異なった文化は、海を渡り島伝いに伝来した。ために海と島は神として崇められ、海や島を再現して神を祀ったのである。これが神池・神島である。当初は庭園として構築したものではないにせよ、飛鳥期以降、神池・神島を基盤として庭園意匠が構成されていったことは間違いない。神池・神島が磐境と異なるのは、土木技術が必要とした点で、これは大陸からの渡来人によってもたらされた造園技術によって各地でつくられたと考えられる。

現存する神池・神島は、後世の庭園・池泉の中島に相当する神島の数、配置、形態などにより次の四系統に分類するこ

施設としては非常に有効であるため、近年世界的に空港や航路上の要所に多数の地上局が設置されている。↓VOR
ティエラ・デル・フエゴ Tierra de Fuego 南アメリカ南端部、マゼラン海峡以南にある島々をいう。このうち最大のフエゴ島のみをさすことが多い。↓フエゴ島
ティエール ⇨チエール

とができる。これらは祭祀の形式や祭神によって決まる。

- (1) 宇佐系あるいは宗像系 三島直線あるいは直線多島形式
- (2) 秋津島系 丁字形二島
- (3) 出雲系あるいは吉備津系 三島による三角形、または四島以上の多島形式
- (4) 阿波系 複雑多島形式

神池・神島よりやや時代が下って、古代の宮居における池と島のあり方を示したものに、池心と瑞籬がある。『日本書紀』巻四の孝昭天皇元年秋七月の条に池心宮の記述があり、同書巻五の崇神天皇三年の条には瑞籬宮の記がある。池心宮とは池泉の中央に中島を置いた形態で、池の中心点の島にある宮居の意である。瑞籬は中島の周辺の水の垣根、つまり池泉を意味する。いうなれば、池心とは池泉の外に立つて宮殿を見たもので、瑞籬（＝水垣）は池泉の中心にある中島から外部を見た考え方である。中島に宮殿を建てるということは、中国の蓬萊神仙の思想に基づくもので、『漢書』によれば、都の長安に太液池が掘られ、池の中に瀛州、蓬萊、方丈の三山をかたどったと記されている。またそうした神仙思想とは別に、池心や瑞籬は一種の城郭的な構えをなしていたであろうとも思われる。

現存する出雲系の神池・神島は、いずれも池心や瑞籬のような構えをみせており、出雲系の神島に祀られている神々は磐座や磐境である事実も注目すべきである。こうした神池や神島の形態は庭園ではなくとも、庭園としての萌芽をみせ始めたものと考えてよい。そして奈良朝ごろから平安中期にかけて本格的な庭園が出現してくるのである。

〔奈良時代〕『日本書紀』によれば、推古天皇（在位五三～五八）のとき蘇我馬子が飛鳥川のほとりに臣下として初めて池泉をつくり島をつくった。このことは当時話題となり、人々は彼を嶋大臣とよんだと記されている。同じ『推古紀』に、庭造りの路子工が渡来し須弥山をつくったとある。法隆寺五重塔の内部に須弥山をかたどったものがあるが、仏説によれば須弥山は世界の中心にある山で、周囲は海であった。『続日本紀』の天平宝字六年（六二）三月の記に、宮殿の南西に新しく池亭をつくり曲水の宴を催したとあり、奈良時代になると多くの園池がつくられた。園城寺園池、薬師寺竜宮池庭、橘島宮苑池、浄御原苑池、藤原宮御苑池、藤原不比等山莊園池、長屋王園池、藤原宇合園池、葛井広成園池など多くつくられたが、現存するものは一つもない。『万葉集』にも当時の数々の池庭が歌われているが、これとても完全な形で残っているものはない。これらの園池は神

池・神島から発展して、庭園としての形をみせ始めたと推察されるが、反面、広大なわりには粗放なものではなかったかと思われる。庭園としての景観を重視して設計整備された、優美で本格的な庭園が出現してくるのは平安時代に入ってからである。

〔平安時代〕景観を主体に庭をつくり、舟遊びの面を強調し、さらに滝を落とし、流れとしての遣水を整備して、優美な眺めをみせた庭園ができあがるのは平安期に入ってからである。この時代の庭園の主体をなすものは池で、洲浜形という海岸線を模した曲線で構成され、中島や岩島を配して海洋的風景を演出した。また東に桜、西に紅葉というように四季を表す樹木を植えた。池は竜頭鑊首の船を浮かべ詩歌管絃を楽しむ舟遊びを目的としたもので、池の中央に一島大きな島を据えて蓬萊島とし、島の間を巡って時々刻々に変わりゆく風景を眺められるようにした。池泉の底部は水が漏らないように粘土を約三〇センチほど厚く張り、さらに水が清らかに澄むように砂利三〇センチほど敷くという念の入った技術で、東西約六五〇尺、南北約八六〇尺（鳥羽離宮）のような大きな池泉もあり、池水は海のようにだと記録されている。

石組意匠は、護岸の場合は三重五重と重ね、滝の三尊石組は上から見た形を正三角形とし、横石風な石を立て、豪健で優美な手法を示している。

こうした庭園の展開の背景には、奈良時代のころからの庭造りに関するさまざまな言い伝えや、禁忌・方法論などの集大成『作庭記』の成立がある。『前栽秘抄』ともよばれる本書はもととも題名のあった卷子本でなく、伏見修理大夫であった橘俊綱の著作といわれ、成立は康平年間（一〇六八～六五）とされる。こうした書物の生まれた平安期の庭園は、作庭家が各地の名所や風情ある場所を参考にしながら、作家独自の心象風景をわかりやすく、具象的に表現したものであった。『作庭記』に「国々の名所をおもひめぐらして。おもしろき所々をわがものになして。おほすがたをそのところ／＼にならずへて。やはらげたつき也」と記されているのを見ても、当時の作庭の事情がよくわかる。すなわち寝殿造庭園では、全体の意匠、つまり地割は同じようにみえても、洲浜や洲崎の形、築山や野筋の規模・形、あるいは滝の規模、水の落とし方、池泉護岸の石組の形、三尊石組の規模、植栽の配置、島の大きさと数、干潟線（汀）の意匠など、さまざまに変化させて作庭したのである。しかし、作庭家がいかに多くの名所を見ようとしても、当時の交通手段を考えると、そこにおのずから限界がある。そこで作庭家が参考にしたのは絵

画であった。

日本の庭園は、平安以降江戸末期に至るまでさまざまな芸術の影響を受けて発展してきたが、とりわけ深く影響を受けたのは絵画であって、平安のころはいうまでもなく大和絵であった。これは日本的な絵画を中国的な絵画の唐絵と区別するために、倭絵と称し、様式や技法よりも題材内容が日本特有の事物であるかどうかを重視したものである。これら大和絵に描かれた日本の四季絵、名所絵、あるいは月々の行事を描いた月次絵が作庭の参考にされ、新しい庭園の意匠として採用された。

平安期にできた池泉の多くは荒廃してしまっていたが、現存するものに、京都の大沢池庭、沙成園、平等院鳳凰堂池庭、勸修寺池庭、積翠園池庭、岩手県毛越寺池庭、静岡県の摩訶耶寺池庭などがあり、いずれも舟遊式の池庭である。

〔鎌倉時代〕初期には舟遊式のものが増えられていたが、やがて舟遊びと回遊を兼ねた形式（西芳寺、鹿苑寺）から回遊のみの庭園（南禅院）へと移行する。池泉の形にも、二つの池を結んだ一種の瓢形の池泉（西芳寺、知恩院）が現れた。平安期から鎌倉期の庭園は平面の地割を多くに重視し、幾何学的・有機的に整然とした地割をしているが、これを高所から俯瞰することによって、さらに平面的美観に加えるに立体構成による美観を考えた。そのために鹿苑寺の金閣のように、楼閣を設け、二階・三階からの俯瞰的観賞にあてた。

池泉の底部は、平安時代より粘土の厚みや砂利の厚みが約半分と薄くなっている。洲浜形の池泉が多く、洲崎の先端に大石を一個据えているのもこの時代の特色である。中島には立石による石組が用いられ、上から見た三尊石組は平安期の正三角形に比べ、二等辺三角形となっている。石橋もこの時代になって架けられるようになった。

建築では書院造が現れ、それに対応して回遊式庭園が多くつくられるようになった。石組も平安期の優美さが消え、時代相を反映して豪健さが好まれるようになる。『作庭記』にかわるこの時代の代表的な造園書『山水并野形図』には新しい庭園に対する意欲がみられ、作庭家阿波阿蘭梨静空の弟子静玄は、鎌倉の二階堂に高さ三層余もある石組を立て、建久三年（一二九二）八月二十四日、源頼朝も見物に出かけたことが『吾妻鏡』に記されている。

平安期に造園の参考とされた大和絵の影響に加えて、中国から来朝した禅僧蘭溪道隆らの意匠が加わり、竜門の滝の様式が生まれた。京都・天竜寺や信州・光前寺（長野県駒ヶ根市）の滝石組がその例である。

〔室町時代〕この時代に入ると、庭園の形態に大きな変化が現れる。初期のころはまだ池泉回遊式が多くつくられたが、それと並行して、屋内から座視して觀賞する觀賞式池泉が現れる。当時の將軍足利義教が庭園を好んだこともあって、一四三〇年（永享二）室町殿に池庭がつくられた。細川右京大夫もこの年京都の自邸に作庭し、大内氏も京都の邸に飛泉亭をつくった。しかし、室町時代は政治的にも経済的にも不安定で疲弊していたから、莫大な工費を要する広大な池泉はつくられなかった。

池底部の粘土は鎌倉期よりもさらに薄くなり、砂利は岩島を意匠する部分にしか敷いていない。これは舟遊びの習慣がなくなつて、それほど清潔な水を必要としなくなったからでもあるし、経済的理由も大きい。現存するこの時期の池泉庭園は、島根県の小川邸・萬福寺・医光寺、山口県の常栄寺・香山園、愛媛県の保国寺、福岡県の龜石坊・横岳崇福寺などかなり多い。こうした足利氏を中心とした各地の作庭には河原者が多く従事し、善阿弥、文阿弥、左近四郎など著名な作庭家が活躍した。

池泉庭園にかわって出現したのが枯山水である。『作庭記』にも、「池もなくやり水もなき所に石をたつること、これを枯山水と名づく」とある。枯山水は水を一滴も使用しないで水の表現をするという一種の抽象表現であり、平安末期にはすでに庭園の一部に使われ始めており、これを前期式枯山水とよんでいる。室町期になると、庭園となるべき敷地は非常に狭く、たとえば京都・大仙院庭園などは約三二坪（約一〇〇平方尺）しかないが、この狭い敷地に広大な池泉を巡らして具象的な内容を盛り込むのはとうてい困難で、いきおい省略的・抽象的表現の庭にならざるをえなかった。すなわち、庭園の本来の姿は山と水が基本であるが、それを、白砂を敷いて海洋の姿とし、岩を配して山あるいは島に見立てるといふ表現方法である。

庭園の構成の参考となるべき絵画も、大和絵はすでに衰退期に差しかり、かわって北宋山水画のような水墨画が盛んになってきた。とくに「破墨山水」といわれる抽象表現の高いものが作庭に与えた影響は大きい。さらに河原者以外にも、雪舟のような画僧が作庭に参加したため、水墨の世界が庭園に生かされ、工事費が安くつくこともあって、禅的な抽象性の高い枯山水が流行した。

また応仁の乱（一四六七）以前は、書院や寺院方丈の南庭は儀式や法会を営むための広場であったが、応仁の乱以後は儀式や法会が屋内で行われるようになり、これらの広場はい

わば無用の長物となった。そこで、その場所につくられたのが竜安寺や大仙院などの方丈前の庭園であり、この時期のものを後期式枯山水とよぶ。以上のような理由から、室町時代の庭は一般に小庭園が多い。

こうした枯山水庭園は、応仁の乱後の一四七八年（文明一〇）以降、京都を中心に流行したが、地方にはあまり伝播しなかった。地方のほうが保守的傾向が強かったからでもあるし、水墨画はまだ京都を中心にもはやされていたからでもある。室町末期になると、枯山水も室町初期の省略的・抽象的表現が薄れ、具象的・説明的になってくる。京都・退蔵院庭園はその好例である。庭園の石組の素材としての石は、平安・鎌倉期に比べて際だって小ぶりになっている。これは庭園が狭くなったためとも考えられるが、雪舟作庭の山口常栄寺のように広大な庭園でも、枯山水部分の石は比較的小さいのである。

植栽に関しては、山口の大内盛見が京都の邸に庭をつくり、わが国で初めて蘇鉄を植えたことが『蔭涼軒日録』にあるが、これは注目すべきことで、蘇鉄は江戸時代になって大いに珍重された。

室町時代は政治的にも経済的にも暗い時代ではあったが、代々の足利將軍は芸術を愛し、庭園愛好家が多く、仏教では禅宗のことも盛んな時代であったから、禅宗寺院に作庭された例が多い。

この時代を代表する池庭としては、慈照寺（京都）、旧大徳寺（兵庫）、旧秀隣寺（滋賀）、北畠氏館址（三重）、常栄寺（山口）、旧龜石坊（福岡）、志度寺（香川）、保国寺（愛媛）などがある。枯山水で有名なものは、前述のほかに、真珠庵、竜源院（京都）、安国寺（広島）などである。

〔安土桃山時代〕この時代は政治上の時代区分としては徳川家康が江戸幕府を開いた一六〇三年（慶長八）までということになるが、絵画や工芸、建築、庭園などの芸術の作風は江戸初期の寛永（一六二四）ごろまで続いたと考えてよい。つまり、桃山芸術の特色である豪華絢爛な風潮は、慶長・元和（一五九一～一六二四）のころよりむしろ寛永期のほうが顕著であった。この時代、大和絵がまた復興の兆しをみせているが、それよりも長谷川等伯や俵屋宗達、狩野山楽・山雪らの雄大で鮮やかな障壁画の発達が目覚ましい。等伯は大画面の障壁画に古典的な水墨画を復興し、宗達や山楽・山雪は金碧の障壁画で装飾性の強い華麗な作品を残した。

桃山期は戦国の様相がようやく鎮静して、平和な社会を迎えた時代で、公武僧俗いずれも明日を思い煩うことなく、豊

かな生活を楽しんだ。武家は自己の勢力を相手に誇示するために金碧の屏風や金の瓦を建築に飾り付けたが、こうした時代風潮は庭園の分野にも浸透して、ふたたび池泉庭園がつくられるようになった。枯山水もなくはないが、豪華華麗な石組を展開させるためには、池泉庭園が適していたからである。織田信長が足利義昭のためにつくった二条旧庭園（現存せず）や、朝倉義景の越前一乗谷館址の諸庭、粉河寺（和歌山）、名古屋城二の丸・三の丸、松尾神社（滋賀）、徳島の阿波国分寺、千秋閣などがある。そして、桃山の華麗な意匠を示した池庭としては、醍醐三寶院、二条城二の丸、光浄院など数多く作庭され、枯山水では京都の本法寺、玉鳳院庭園などがある。

この時代の池泉の底部の構造は室町期と大差ないが、大きく変化したのは石組の素材である。室町期の小ぶりの石とは対照的に、高さ二、三尺、重さが二、三倍以上もある大きく豪快なものを数多く用い、それも集団的に用いている。

池泉では島を多くつくり、中央の大きい島を蓬萊島とし、ときには鶴島、亀島で表現した。新しい手法としては、蓬萊島に石橋などの橋が架けられる。本来、蓬萊島は海上はるかな理想郷とされていたから、それまでの池泉庭園では、島を往来する船が港に停泊しているさまに見立てて石組にした夜泊・石組が行われていたのであるが、その蓬萊島へ歩いて渡れるように橋を架けたのは画期的なことであった。

三尊石組は、平安期の正三角形、鎌倉期の二等辺三角形、室町期の前期よりさらに開いた二等辺三角形があったが、桃山期には不等辺三角形という変則的で動きの激しいものとなり、この時代にふさわしい表現となった。

この時代のもう一つの大きな特色は、茶の湯のための露地が創案されたことである。それまでの庭園はすべて觀賞するためか、あるいは舟遊びや遣水にみられるような文学的遊びの庭であったが、露地はそれまでの庭の性格とはまったく異なる、茶室に入るための実用の庭であった。それも最初は「面ノ坪ノ内」とか「脇ノ坪ノ内」とかよばれて、せいぜい一〜四坪くらいの狭い庭空間で、植栽はなく、坪の外は松林とか大きい松が一本あるのみの簡素なものであった。それがしだいに意匠を整え、雨の日のために敷石や飛石が考案され、手水鉢や石灯籠、垣根などが取り入れられ、茶室に至る通路としての侘びた庭の体裁を完成させたのである。この露地の意匠は一般の庭園にも応用され、現在にまで及んでいる。豊臣秀吉は蘇鉄だけの露地をつくり、千利休在世のころまでに二重露地が完成していた。なお、寛永期の特徴とし